

東 桂 小 だ よ り

10号 令和2年 2月25日 発行責任者：校長 志村雅巳

学校教育具体目標

- ㊦ 進んで学ぶ子ども
- ㊦ 思いやりのある子ども
- ㊦ 健康でたくましい子ども

令和元年度 最後の授業参観！

去る、2月14日（4～6年）・21日（1年～3年）に多くの保護者の皆様方にご来校いただき、今年度最後の授業参観が行われました。4月から数えて11ヶ月という短い期間ですが、最初の授業参観等の様子を思い浮かべることで学校生活における子ども達の成長ぶりが見られたのではないのでしょうか。

今後とも、子ども達の成長を楽しみにしながら学校行事等に対し多くのご参加をお願い致します。



子どもの成長とともに 言い聞かせる → 聞く・尊重する・対話する！

義務教育段階における子ども達の成長はめざましいものがあります。ともすると、その成長のスピードに親の見ていた感覚が置きざりにされてしまい「こんな子ではなかったのに」と惑わされてしまうケースさえあります。

特に、二次性徴の始まる小学校（中・高）学年くらいから思春期の真っ只中である高校生くらいまでは、著しい変化を遂げ、親子の会話が減少していくことも少なくありません。当然、自我も目覚め、自分なりの考えや主張も持ち始める中で、親に対し反抗することも起こってきます。

幼少児童期には言い聞かせるだけで済んでいたものが、同じ事を続けているうちに【口うるさい大人】になってしまい、良くも悪くも周りにいる友人や優しく擁護してくれる知人の影響を強く受けるようになるのです。そして、成長とともに人間関係が広まり、様々な見方・考え方を知るようになり、取捨選択しながら学んでいくことになるものです。

これは、私たち教員も同様であり、多くの会社社会でも同じ事が言えると思います。何もわからない・知らない人には言い聞かせることができても、自分なりの考えを持つようになると考えが合わない場合には、単なる【口うるさい人】になってしまいます。

認めることやフォローも大切にしながら、何が大切なのかを心の中に落とし込みながら資質を向上させていくことが大切だと思います。

私が教員向けに提示する資料を一部抜粋してご紹介致します。



子供の発達段階や習熟度によって指導内容や手法も変えなければならない。また、指導によって成長が図られた場合には、徐々に指導の関わりを緩めていき、子供たち自身の手で運営できるよう指導していく必要がある。

重要なことは、発達段階や習熟度の見極めと、それに見合った長期目標・短期目標の明確化及びそれを達成させるための指導方法と工夫（引き出しの多さ）である。

指導の過程で感情のぶつかり合いが起こることもあると思います。許してはいけない事、我慢できない事、人間の織りなす世界ですので当然のことだと思います。それらを指導していく場合、叱った（怒った）まま放置した経験はないですか？

放置したままでは、子供との関係も悪化するばかりで、教師としての力量も伸ばせないままにいくこととなります。**フォローが重要です。**

言うこと・伝えることの違い！

大人が子どもを叱る時、「○○って言ったでしょう！」とよく耳にします。しかし、言ったこと全てが伝わって（納得して）いるとは限りません。また、伝わっていたとしても、同じミスをすることもある。ということを理解した上で指導していかなければなりません。伝わってなければ伝わるよう**手法を変えて伝え**なければならないのです。

特に、自我の目覚めている子ども達に対しては「きちんと話を聞く」・「話している本人を尊重する」・「しっかりと対話」をすることが重要であり、一方的な「言った・話した」は、主従関係の押し込みにしかならず納得させていくことは困難です。

今年は、うるう年！

通常、2月は28日までしかありませんが、4年に一度の「うるう年」では、29日が設けられます。

しかし、「なぜ2月は1日増えたり減ったりするの？」とお子さまに聞かれて、「うるう年って何だろう？」と考えてみたことはないでしょうか。



現在の日本で使われている「太陽暦」の1年は、365日とされています。これは地球が太陽のまわりを1周するのにかかる日数ですが、実は1年につき6時間ほど足りません。そのため4年経つと、6時間×4=24時間、つまりあと約1日分の時間が、地球が4年前にいたもとの位置に戻るために必要になるのです。

そこで、紀元前1世紀に太陽暦を使い始めたローマでは、「西暦の年号が4でわりきれぬ年」をうるう年と定め、4年に一度、1年の日数を1日増やして調整するようにした…というわけです。ただ、この調整は完璧なものではありません。本当のズレは6時間ではなく5時間49分なので、うるう年を設定したことで、実は1年につき約11分の増やしすぎになっています。

そのためさらなる微調整が必要になり、16世紀に例外として「西暦の年号が100でわりきれぬ&400ではわりきれぬ年」は、うるう年にはならないというルールができました。

本来、400年経つと、11分×400=4400分÷73時間、つまり約3日分の時間が増えてしまいます。そこで、うるう年を3回減らすことで、約3日分の時間を減らすことにしたのです。たとえば、西暦2100年、2200年、2300年などは、例外に当てはまるため、うるう年にはなりません。西暦2400年は100で割り切れますが、同時に400でも割り切れるので、例外には当てはまらず、うるう年となります。なかなか複雑なシステムです。



それでは、うるう年はなぜ2月にあるのでしょうか？ それは「2月が一番短い月だから」という理由だけではありません。古代ローマの1年は現在の3月から始まり、2月で終わりを迎えていました。そのため、わかりやすく最後の月となる2月に、うるう年を設定した、とされています。

また、2月29日生まれの人が、4年経たないと年をとらない…という事態が起こらないのもちゃんとした理由があります。日本の法律では「年齢が増えるのは、誕生日の前日の24時」と定められていますから、毎年2月28日の終わりにきちんと1歳年をとるのです。

うるう年は人が正確に時間を決めようとした偉業の現れかもしれません。

参考：

ベネッセ教育サイト

デイヴィッド・E・ダンカン 松浦俊輔訳『暦をつくった人々』（河出書房新社）

江口鳳祥『このみの基本学』（株式会社神宮館）

